

---

# 悪魔と愛の模様

零月零日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔と愛の模様

### 【著者名】

205842

### 【作者名】

零月零日

### 【あらすじ】

「君に笑顔を届けられるのなら、僕は悪魔に魂を売り渡そう。  
彼の願いは、実に些細な物。だが、彼が彼ではその願いすらも叶えられはしない。

『白雪家に歯向かう者は、奴らが飼っている悪魔に殺される』

國主の少女を主人に、悪魔は殺し尽くす。  
その先に待つのは……。

序章

どうして、僕はこんなにも辛いのだろう。  
どうして、僕は涙を流しているのだろう。  
悲しくなんか無い、全ては彼女のために。

彼女が必要ないものなら、それは世界が必要の無いものなのだ。  
彼女が邪魔に思うものなら、それは世界に取つて邪魔なものなのだ。

彼女が疎ましく思つものなら、それは世界に嫌われているものなのだ。

彼女が殺してくれと頼むなら、僕はそれを殺そう。  
だけど、どうして、僕は泣いているのだろう。  
？？ああそ？？か。僕は嬉しいから泣いているのだ。  
でも、それなら。

この心に突き刺さるような痛みは、一体なんだというのだろう。  
分からぬ、こんな痛み。  
知られたくないな、見られたくないな、笑つていて欲しいな。  
辛くない、悲しくない、楽しくもない。

悪魔が笑つている。

僕は泣いている。

彼女は笑つている。

彼女は僕に普通に話し掛けてくれた。彼女にとつては、僕も一人の国民だった。

ただそれだけで、僕は救われた気がした。

その素直な笑顔を見られただけで、僕は幸せになれた気がした。  
だから。

君に笑顔を届けられるのなら、僕は悪魔に魂を売り渡そう。

## 序章（後書き）

はじめまして。

これは作者の初作品で、感想や意見を教えていただけたと嬉しいです。

# 第一章 ～意地悪と悪戯～ 1

## 第一章 ～意地悪の悪戯～ 1

「先輩、どうしたんですか？ 青鬼にきな粉をかけたような顔色ですよ？」

「……何だよその比喩。ちょっとだけ寝不足なだけだよ」

「駄目ですよ、寝不足なんて。だから背が伸びないんですよ？」

「確かに僕はあまり背が高くないし、寝る子は育つと言つけど。これでも平均身長だから良い。それに、背が低い方が得な事もあるし」

「負け惜しみですね。例えば、なんですか？」

「鬼ごっこで小回りに動けるとか、かくれんぼで隠れる場所が増えるとか」

「先輩つて、子供なんですね」

「……白雪つて、意外と意地悪だな」

「そんなことは無いですよ？ ただ、事実と私の感想を言つているまでです」

「それが意地悪だつて言つてるんだけど」

「じゃあ先輩は、心にもないお世辞を言つてほしいんですか？』

『背は大きくなきけど夢は大きいんですね』とか『誇大妄想は良い事です』とか『先輩小さくて女装が似合いそう』とか

「……白雪。褒めてないだろ、馬鹿にしてるだろ、確かに僕はそういう人間だけど。女装が似合つという部分には全力をつくして反対するがな」

「そうですか？ 先輩の名前も女の子っぽいですよね。ミー、だなんて可愛いです」

「……えつと、男としては可愛いとかあまり嬉しいんだけど、女としては？」

「僕は男だよ」

「またまた。先輩、きっと女装が似合いますよ。ミトちゃんなんて、可愛らしくて良い名前じゃないですか」

「…………白雪。怒つても良いか？」

しかし内心では、女装という単語に安心していたりする。男が女の格好をするから女装。白雪もちゃんと僕のことを男だと解っているじゃないか。

しかしあまり嬉しくない。女装が似合うとか、結構気にしているが、

「ふふっ、拗ねる先輩、ちょっと可愛いですね」

「…………」

ぐうの音も出ない僕がいた。どうにも小悪魔的な後輩だ。

「…………悪魔は僕だろ。」

僕らは昼休み、学校の屋上で昼食を取った後、いつも通りにフェンスに凭れ掛かりながら話をしていた。フェンスが錆び付いていた場合の事は考えたくない。

僕らの通う学校は、訳ありの人たちを集めた学校で、人付き合いをするための場所ではない。訳あり、と言つても生活に困っている人向けの学校というのがメインだ。孤児や毎日の生活に困る程の収入しかない子供を多く集めている。入学に当たつて必要なのは呼び名だけ。教えることは仕事に必要なものだけ。だから、名前も多少偽れたり。

先輩こと僕（ミト。ミト）という名前を心の底から捨てたいと望んでいる僕（ミト）は、先輩風に吹かれて後輩を気遣う。

「白雪、そういうお前だって顔色があまり良くないぞ？ 例えるなら、一日酔いでジョットロースターに乗った人みたいに」

「そうですよ、疲れているんです。顔色だつて悪いんです。先輩ならもうつと労つてくださいよ」

偉そうに上から物を言つ白雪お嬢様。

後輩こと白雪（本名白雪奈美）は、国を動かせる程のお嬢様。と言つより、國主。

そんな白雪に話しかけられて、眞利に及ぶる握手握手やべえ今日は手洗えないや、とか思った事は一度も無い。僕はそういう権力に負けるようなことは言いたくない。

まあ、白雪に話しかけられて、僕の人生は転機を迎えたけど。「はいはい、何か知らないけど頑張りましたね。で、何か困っている事でもあるのか？ 僕で良ければ相談に乗るけど？」

露骨に悪そうな顔をする白雪。『悪やう』では語弊がありそうなのであえて言つが、悪魔の微笑とかではなく、僕に対し悪いとう気遣いが見える顔だ。

本当に優しい奴だ。その優しさで身を滅ぼしそうなくらいに。

「えつと、大したことじゃないんですけど？？」

白雪はそう何か言いかけ、そして、

「？？まあ、先輩みたいな庶民には解らない話ですよ。気にしないでください……」

と無理矢理笑顔を作る。

「どうせ私はこの国の行く末を変えてしまつようなお嬢様で、先輩はどこにでもいるような一般人なんですから。私のことなんて、どうでもいいでしょう？ ？？返事はいりません。殺されてしましますから……」

「…………」

僕は白雪のそういう台詞が嫌いだった。

『白雪家に歯向かう者は、奴らが飼っている悪魔に殺される』といふ噂が、白雪の人間関係を壊していた。

白雪がこの学校に入学したのも、それが理由だ。本名を名乗れば、たちまち敬遠されてしまうのだから。

だが、この学校に入学できたからと書いて、普通の学校のような生徒同士の馴れ合いはあまりない。皆、自分が毎日を生きるのに精一

杯なのだ。

当然、白雪に同学年の友達はいない。以前の学校では仲良くなつても、白雪の事を知れば態度を変えてしまつたらしい。白雪はそんな態度を望んではいらないのに。

結果、白雪は自分を偽るようなことを言つよつになつた。最初から期待していない、と思つたために。希望を見ないために。絶望を味わいたくないから。

まあ、この場では冗談で言つていいのだろうが。

だけど、僕は冗談でも許せなかつた。そんな悲しそうな顔が、僕は嫌いだつた。

だから、僕は？？、

「どうでも言い分けないだる。そんな自分を蔑むよつな事を言つなよ。僕は？？」

そこで、止まつてしまつた。僕は？？、一体この先に何を言えれば良いのだろう。

「先輩……」

白雪が僕を見つめてくる。考え込むことで、逆に白雪の視線が痛く感じるようになつてしまつ。言わない方が良いに決まつていると思つ自分に腹が立つ。

でも？？「めんなさい僕は意氣地なしですへタレです。

しかし、次の白雪の台詞で僕のそんな思考は消し飛んだ。

「先輩は、私の事、どう思つてるんですか？……私に、興味があるんですね？」

最初の質問必要ないんじゃない？とか口から出さうだけど、白雪と田と田が合つちゃつて、口がパクパク動いちゃつて、えら呼吸が出来なくて、頭が混乱して来て、白雪さんその確信したような言葉は一体なんですかその面白を誘つよつた言葉使つは卑法です、と思つた。

「…………」

結局、思つただけで、何も口から出なかつたけれど。

「ふふつ、可愛いですね」

小さく小悪魔みたいに笑う白雪。

そして、腕時計を見て時間を確認。そろそろ昼休みが終わるようすで、白雪は弁当を持って屋上の扉に向かいながら、付け加えるようにして、僕をちらりと見てこうと言った。

「そんな先輩の事、私も少し気になつてたり」

「えつ？」

では、と小さく会釈して白雪は校舎の中に消えて行く。

「…………聞き間違い、じゃないよな」

……なんか、完全に負けた氣がする。何に負けたのか全然わからぬいけど、この敗北感はなんとも言えない。

と、黒猫が僕の前に現れた。深い闇を思わせる真っ黒な黒猫。なぜいるのだろうか？

「やつぱり、僕は白雪に弱いよな」

そう話し掛けてみたが、黒猫は顔を洗つているだけで、何も言いはしなかつた。

当たり前だけだ。

でも、顔を洗つて出直して来い、と言つてこうよりも見えた。

極東の島国であった旧國家が崩壊してすぐ、この国は出来上がりた。というより、旧國家が崩壊する原因はこの國にある（いや、根本な原因は計三回に及ぶ政権交代と、八回に渡る総理の辞職が原因だが）。

当時、この土地を統治していた白雪伊夜氏は総理にこう言った。

『もうあなたの方の茶番劇にはついて行けない。私はこの北の大地に、新たな国を作りたい。独立させてもらつ』

呆気にとられた総理に追い討ちを掛けるように、次々と地方を統治していた人達が独立を宣言したのだ。

こうして、『黄金の国』や『侍の国』、『先進諸島国』などと呼ばれた極東の島国は崩壊した。

そして、月夜氏はこの国を作り上げた。

白雪月夜氏はこの国を、いわば王政にした。全ての決定権は國主である月夜氏のものとなつた。しかしそれは民主主義に染まつた國民に多少の反感を買つた。だが、月夜氏の政治はすぐに支持された。不景氣から脱するため、食料自給率の引き上げを行なつた政策のおかげだろう。

#### 『職のための食による政策』

腹が減つては戦はできぬ？？、単純そうに思えたこの政策は、意外にも景気を回復させた。

白雪家が農家や漁業関係者に資金を回す。そして、職に困っている人達を人材として派遣し就職させる。食料も増え、価格が下がる。職に就き収入が入り、食料品も安く手に入るようになり、再び物流が生まれ、不景氣は回復したのだ。

しかし、今も謎のままだが、突然、月夜氏は失踪。それにより、月夜氏の一人娘だった白雪奈美が國主となつたのだ。

白雪月夜は、なぜ消えなければならなかつたのだろうか？  
それは？？。

「先輩？　どうしたんですか？」

「ん……何でも無い」

と、今の國主たる白雪お嬢様が僕の顔を覗き込んでいた。白雪の子猫のような瞳になんだか僕は弱いので、適当に誤魔化したが。放課後、僕と白雪は歩いて街へと向かつていた。

今現在、彼女は白雪家の当主であり、この國の國主であるが、彼女の顔を見た事がある人は、ほとんどいないだろう。  
あまり良い話ではないが、跡継ぎがまだいない白雪が殺されてしまふと國家崩壊に陥つてしまふ。そのため、大臣達は白雪のお披露目はせずにはいるのだ。

僕のような白雪本人から名前を聞いた人や、國の政治に関わっているか白雪家に仕えている者くらいしか、白雪の顔を知る者はいな

い。更言うなら、僕のよつに白雪が國主になつてから知り合つた人は、殆どいだろ？

待ち行く人々の目は、あまり僕らを見ない。もしも顔を公表いたら、白雪にこんな自由はなかつただろう。間にボディーガードとかがいそぐだ。自由も無いだろ？ ポテチとか炭酸飲料を禁止にされそうだ。

そんな生活はしたくないな……。

「先輩、気分が優れないのでしたら、今日は止めましょうか？」と、目敏く白雪は僕の浮かない表情を気にする。

「違うや。ちょっとと考え事と言つたが、ポテチは美味しい」というか「はい？」と言つて首を傾げる白雪。その仕草がいちいち子猫のようで可愛い。

動物に例えるのはなんだか気が引けるので、口には出さないけど。「で、白雪。どつか行きたい場所はあるのか？」

「そうですね、と白雪は考え込む。本心から迷つているように見える。

何せいつも外を歩ける事はあまりないので、週に一回あれば良い方、月に一度か二度が基本だ。いくら顔が公表されていいからと言っても、お嬢様は忙しく大変だ。

政治的何せ、一部の犯罪者の生殺与奪の権すらも持つているのだから。

「では、川原に散歩でも行きましょう。自然の恵みで先輩の気分も良くなるかもしれませんし」

うわあ、後輩に気を遣わせている僕、かつて悪い。それもお嬢様。ざ、罪悪感が高まる。氣遣いが重い。思いが重くて、想いに答えられない。

「別に僕に気を遣わなくて良いんだぞ？ 白雪の行きたいところに行けば良いんだ」

白雪はこり笑つて言つ。

「心配いりません。外の世界なら、どこに行つても楽しいですし、

先輩と一緒に向かいです

ぐはん。

やばい、一体僕が何をしたと言つんだろ。生殺しと言つたか、首だけで生かされている気分にされる。な、なんだか胸が苦しい。絶対裏でなにか思つている後輩一人。奇麗すぎる笑顔が逆に怪しい。

白なのに黒く見える後輩。

僕の目が腐つてゐるのならばいいけれど。いや、全然良くないけど。「……えっと、じゃあ川原に行く前にちょっと寄つて行きたい場所があるんだけど、いいか?」

「いいですよ? 勿論、変な所でしたらどうなるか、お分かりですよね?」

やつぱり意地悪な後輩だつた。一言余計だろ。僕と一緒に向かいに行つても楽しいんじやないのかよ。

くそ、僕だつて先輩だ。後輩に少しばかり良い場面を見せなければ。「おじさん。いつもの一つください」「はいよ。……一つ? おいおい、彼女でも出来たのか? ん?」僕をからかいながら、さり気なく一つ分サービスしてくれのおじさん。P.J.、プロフェッショナルの仕事だ。

場所は街中の小さなパン屋さん。『パンツくつたことある?』と聞いたら、おうよ! とはつきり答えたおじさんが店を構えている。その後殴られたけど。小さいながらも潰れない辺りを見ると、常連客が一定数いるようだ(という僕がその一人。べ、別に脅されて来てる訳じゃないんだからねっ!)と言つと怪しく聞こえるこの『時世』。

白雪は物珍しそうに店内を物色中。時折、『パンにこんなに種類があつたとは……』などと呴いてゐる。パン屋さんに来たことが無かつたのだろうか?

ちなみに、見ていたパンは『アバターパン』。粒あんとバターの入ったパン。

……さすがにパン屋くらいには来た事あるか。確かにこんな種類もあるんだな、と思う。」

白雪の物珍しそうな視線に気付いたのか、おじさんが白雪に向ひ、「好きなパン、一ついいぜ！」

「いいんですか！？」

白雪が驚いたような嬉しいような表情でおじさんの顔を見る。数秒おじさんの顔が固まり、けれどすぐに一いつと笑って、おうよーと親指をぐつと立てる。

気前が良いし、パンの味も良い。だが、一つこの店には問題がある。

気前が良すぎて潰れる寸前。売れ残ったパンを近所の子供達に無料で配るという奉仕活動を毎日のように行なうし、そのために夕方にパンを焼いたりする（それ田舎で来たのだが）ためだ。ジャムおじさんかよ、あんたは。

お大事に～、という謎の言葉に、ありがとうございます、と返し僕らはパン屋を後にした。何を大事にしろと言ったのか、薄々僕は気付いている。

川原に向かう道すがら、僕はちよつと気になつたので聞いてみた事にした。

「白雪、パン屋には行つたこと無かつたのか？」

「はい。…………ですの、少々新鮮と言つたが、嬉しかつたと言つた」

と言つて、もらつたパンの入つた袋をぎゅっと抱きしめ笑つてみせる白雪。なんといふか、意地悪とか言えなくなつちゃいそうな顔。ちなみに、白雪のもらつたパンは『アンパン』だった。

……何も言つまい。

「ところで、先輩は一体何を買つたんですか？」

「ん？　ああ、これだよ」

と言つて僕は袋を見せる。『ベーカリー Pan屋』と書かれた紙袋の中に袋が一つ。

『ベーカリー Pan屋』……、良い名前じゃないか。店の看板と袋に描かれているパンダのマスクも可愛氣があるし。……馬鹿にはしないよ。ただ、呆れているだけだ。

と、白雪は半ば強引に、力強く体全体を使って僕から紙袋を奪つた。

「これは……、パンの耳ですか？」

袋の中を覗き込み、僕の目をまっすぐ見て白雪が聞く。何も悪い事はしていないとばかりに。……そうだ、何も悪い事はなかつた。僕も白雪の体が？？なんでもない。

「そ。安くて美味しいからや」

パンの耳をバターたっぷりのフライパンで焼き、砂糖を絡めた一品。一袋三十円也。

そう言つてさりげなく袋を返してもらひ。素直に返してくれたけど、白雪の鞄も一緒だった。お持ちすれば良いんですね、白雪お嬢様。

とか何とか話している間に、川が見えた。白雪が國主になつてから随分と奇麗なつた川。子供の遊び場所が減る今日、少しでも外で遊べる場所を、と街中を通る川を整備したのだ。

その川と向かい合つように土手に腰掛け、二人でパンを食べる。

その際、僕はそのまま腰掛け、白雪は下にハンカチを敷いていた。

「あつ、おいしいですね」

アンパンを食べて白雪は言つ。食べた瞬間、一瞬顔が綻んだのを僕は見逃さなかつた？？つて、僕はストーカーかよ。

「そう？ そりゃ良かつた」

僕もパンの耳を食しながら答える。たまにはこいつの良いだろつ。

「あれ？ 先輩、気分良さそうですね。もしかして……、ただお腹が減つただけですか？」

案外そうかもな、と返事をしている僕の手からパンの耳を掠め取つて食べる白雪。

いやいや、何のために一袋買つたと思つてゐるのかね。

「え？ それって私へのお土産のためじゃないんですか？」

「うつ言つてもう一つの袋を指差す白雪。信じて疑わない目だ。

「…………、そうだった。夜食がなんかにじびつや」

「はい。ありがたく頂きます。お店のおじさんに感謝して食べますね？」

にににり笑つて袋を受け取る白雪。

うん、合つてる。僕が買ったのは一袋だけだし。偉いな白雪。なんかこつちは寂しいけど。

「先輩つて、人を見る目がありますよね。前に紹介してくれた定食屋の人も親切でしたし、今回もいろいろサービスしてもらいましたし」

「まあな。名字が人見だからかな。神道系の家系だし」

「人見だから人を見る目がある、ですか？ そつかもせんね  
投げやりな返事は、白雪が實に下らないシャレを聞いた時にいつもする」とだ。

……時折思つことなんだが、もしかして白雪は僕のこと嫌いなんだろつか？ 僕は僕なりにある程度意味を込めて言つてゐる事なんだけど。

結構な頻度で意地悪されてゐるんだけど。

食べ終えたパンの袋を一つにまとめ、近くのゴミ箱へ捨てに行く白雪。本当なら僕がやるべき事のような気がするが、今となつてはもう遅い。後悔後に立たず。あれ？ なんか違う。

しかし本当に、お嬢様つて感じじゃないよな。我假じやないし、丁寧だし。

……まあ、意地悪なこともあるけど。

でも、優しいし。

本当に、出来た奴だよ。出来すぎだよ。劣等感を抱きはしないけど。

「白雪はさ、今のお嬢様の生活と普通の一般庶民の生活、どちらがいいと思つ?」

川原の散歩をしながら、僕は何気なく聞いてみた。

白雪は少し考え、唇に左の人差し指を添え、

「普通の一般庶民の生活とは、一体どんなものですか?」

と質問に質問を返してきた。

むへ、確かにそうだよな。比較するに当たっては、どちらもある程度知つて置かなければいけないか。単に僕に意地悪で言つてこるわけではあるまい。

「えっと、学校に通つて、家で家事をやつたり買い物に出たり?? といった感じかな」

僕の適当にして魅力も無い宣伝に、やうですか、と黙つて白雪は考え込む。そして、

「やつぱり、普通の暮らしに憧れます」

と苦笑いを浮かべて答えた。

その返答は解かつていたが、やつぱり気に障つた。『憧れ』……ね。

まるで、叶わない夢のように言ひじやないか。

「今の生活に不満はありませんが、でも、私は思ひこんです」

白雪は少し顔を俯ける。

「私が国主なんて、不釣合いだと。私は国主になるような器じゃないと思うんですけど」

僕は答えこそ聞いていたが、しかし、別のことを考えていた。

だから、次に口から出た台詞は、どうにもおかしかった。

「お前は悪くないだろ、白雪。だから、そんな悲しそうな顔をするなよ。お前は笑つてる顔が一番だから」

「えつ! ? あ、あの、せつ、先輩?」

途端、僕は何を言つてるんだよ、と恥ずかしくなつた。思わず呆然とする白雪から顔を背けてしまつ。

うわあ、恥ずかしい。羞恥心で身が焦げてしまいそう。ほんがり

ウェルダンに。

白雪も動搖しているのか、口が回っていない。

どうしよう、すごく気まずくなってしまいそうだ。無言のまま一人で歩くとか、罰ゲームも同然じゃないか。罰ゲームと書つよりは、恥ゲーム。……全然上手くない。

と、すじくタイミングよく白雪の携帯のアラームが鳴る。  
すいません、と断りを入れて白雪は携帯を取り出す。

良かった、これで嫌な雰囲気は脱しそうだ。さすが、今のうちに何か話題でも考えておこう。などと変に上機嫌な僕。僕が策士だった、なんらかのトリックでこのタイミングに電話を鳴らしただろう。どうやって？

電話を終えた白雪は少々残念そうに、もう時間みたいですが、と言つた。

これを普段の会話への糸口にしよう、と内心で思つてゐる僕は非道だ。

「『めんなな白雪。僕の所為で予定狂つただろ？ 行きたい場所とかあつたんぢやないのか？』

僕の自分の傷口を広げるだけの問いに白雪は慌てたようになつた。「いえ、謝らないでください。先輩の気分が悪かつたおかげで、楽しい思い出を作れました。どうもありがとうございました。パン、おいしかつたです」

「…………そりやどうも」

「いえ、先輩が誇る所は一つもありませんよ」

「…………そうですね」

…………白雪、なんだか言葉の端々に悪意を感じるぞ。

その後、少しだけ急いで学校に戻り白雪と分かれた。学校に側近の人が迎えに来るのである。

「では先輩、また明日」

「うん。また明日」

手を振つて白雪は学校の中に。一緒にいる所を見られるとなまづい

うらやましい。

まあ、僕としても少々それはまずいので、特に気にする事なく僕は家に向かった。

白雪奈美がただの少女だったなりが、僕と白雪の関係はこうはならなかつただろう。

僕と白雪が出会いことも無く、出会つたとしても、こんな仲にはならなかつただろう。

だけど僕は思う。

これは奇跡でもなんでもなく、運命の悪戯だと。

第一章 ～意地悪の悪戯～ 2

暗く閉め切つた部屋で、男一人と人影が会話する。

「お前の任務は、ただ彼らを狩れば良いだけだ。正確な人数は解らないが、しかし潜伏場所は解っている。ただお前は、そこで誰一人残さず、誰にも見られる事無く彼らを狩れば良い」

「……なぜですか？　彼らには、何か問題でもあるのですか？」

「理由が必要か？　お嬢様が望むことなのですよ？」

「……それは、本当にお嬢様の命令なんですか？」

「疑うのかい？　私の言葉を」

「……いえ、そういう訳では」

「君は『狗』だろう？　お嬢様の願いを叶えるのが、君の役割だろう？」

「……」

「少しだけ教えてやる。彼らはここ最近巷で騒がれている強盗だ。野放しにはできない、そうお嬢様が判断なさった」

「……そうですか」

「さつさと行かんと、明日の朝には戻つてこれぬぞ」

「……」

消え去つた『狗』と呼ばれた人影を、侮蔑するように男は言つ。  
「お嬢様のためと言うだけで動くとは、扱いやすい奴だ。中途半端な疑いは、何の意味も無い」

それは、雲が月を覆い隠し、深い闇が辺りを包み込む夜だった。辺りに明かりは見えず、暗くどこまでも続きそうな深い闇が広がつていてる。

事件は、路地裏で起こっていた。

「あ……あ……」

少年は目を閉じていられなかつた。

あまりの光景に、目を見開いていた。

今まで一緒に生きてきた仲間達が、非常に無情に異常に、次々と彼の目の前で倒れて行く。

人影のようなモノが、仲間達を襲つていた。

ソレは全身が闇のように深い黒色の人影だつた。探偵もののアニメに出て来るような、黒で塗装された犯人の影、と言つた感じだ。その人影の動きに迷いは無く、ともすれば芸術に見えないでもない動きだつた。

仲間のすぐ側まで影が現れ、仲間が倒れ、また仲間の元へ人影が寄つて行く。なぜ仲間が倒れたのは、少年には解らない。

少年の仲間の一人が人影に殴り掛かる。

けれど、それは影を殴るような不可能な事だつた。

仲間の拳は人影を突き抜け、体勢が崩れる。それを人影の腕が掴んだ。そして、触手のような黒い何かが、その腕から仲間の全身を覆うように伸び始めた。少年は動けなかつた。

触手のような何かはまず仲間の口を覆い、続いて腕や足などを縛るようになじみ付いていく。そして、体が完全に黒く覆われると、人影は仲間から手を離した。途端、支えを失つた体は重力に従つてバタリと倒れた。

ゆらり、と人影が揺れる。その人影は、この世界のモノで無いようだ。うに、朧な影だ。

そして人影は、最後に残つた少年の前に立つた。

人影は言つた。

「僕は悪魔だ」「俺は悪魔だ」

一つの人影から二つの声。どちらも、青年のような声だつた。そして、一つ目の声が言う。

「お前達に恨みは無いが、我が主のため、殺させてもらひ。??死

ね

不意に告げられた死の宣告だったが、しかし少年は驚かなかつた。

「あ……」

そして。

すーっと、雲の切れ間から月光が差し込み、そして少年は気が付いた。

その人影の頬に伝う小さな一滴の光に。

悪魔は、泣いていた。

悪魔の足下から影が伸び、少年の体を包み込む。徐々にその体を蝕むように、影はその体を飲み込んで行く。  
そして、少年の体は完全に闇に飲まれた。  
少年は不思議と何も感じなかつた。いや、何も感じる間もなかつたのかもしれない。

少年は、死んだ。

路地裏を出て、誰もいない夜の街を歩きながら、人影は誰に語るわけでもなく、ただ呟いた。

「これで本当に良いのか？……白雪」

一つ目の中の声の呴きに答えるように、二つ目の中の声が答える。

「悪魔はあくまで、悪魔なんだよ。『良い』わけないだろ」「……まったくだな。影の悪魔、シェイド」「そうだろ？ 我が契約者、ミトモ」

そして二つ目の声は小さく笑いながら言った。

「俺はお前の望みを叶えよう。お前は俺に魂を売り渡したのだから人影は黒光りする懐中時計を取り出し、針が指す文字を見る。長針が？、中針が？、短針が？を指している。

そして、『悪魔』は言つ。

「……僕の魂が死ぬまでに、僕は白雪を幸せにしてみせよつ

第一章 ～意地悪の悪戯～ 3

その日は、特に天気が良い訳でもなかつた。夜が明けようという時刻でもあつた。そんな環境だったから、少年達はその誘いに乗つてしまつたのかもしれない。

「……本当に、いいのか？」

少年達は、男に尋ねる。

男は仮面で顔を隠し、その姿もはつきりとしてはいない。だが、言動には重みがある。

「ああ、勿論だ。君たちは何も悪くない。悪いのは、全て私だ」少年達は男を怪しそうに顔を見合わせる。そして、男の顔を伺うようにして言った。

「…………だが、強盗だぞ？」

「心配するな。全ての責任は私が持とう。君たちの事は解つているつもりだ」

「…………本当、なんだな？」

男はふつと笑い、手を差し出す。

「勿論だ。信じる者を救おう。？？いや、信じぬ者も救おう」

少年達、巷を騒がせる強盗の犯人達は、男に手を差し出した。

そして男は少年達に札束を渡した。諭吉が百枚で束ねられていた。

それから数刻後、とある小さなビルで。

男の元に一人の女が現れた。女はスースイ姿で、無愛想に目を伏せている。だが少なからず、男に敬意をこめているのが伺えた。

そのビルの一室で、男は傷一つないガラスのデスクに肘をつけながら、その前に立つ女の話を聞いていた。

「～」苦労様です。あなたはやはり、人を引きつける何かを持つてい

らつしやる

「そうか？……それはそれであまり嬉しくないな」

「……どうこう事ですか？」

「何、君には解らないだろ。とにかく、強盗の件だが、ここまでは君との計画通りだ」

「はい。ですから、こうしてお礼に」

「いや、お礼などいらないよ。例え君に頼まれずとも、私は自分でやっていた事だ」

「……そうなのですか？」

女が尋ねるのに頷き、男は言つ。

「現状に満足できるのは、恐らく保つて数年だらう。白雪お嬢様の年齢を考えれば、それは早すぎる限界だ。まあ、今のような状況ではしようがない」

「……あなたは、白雪家が怖くはないのですか？」

「怖い？ 白雪家が？」

「はい。……少なくとも、私と同じ考え方を持つ者があなたの他にもいました。しかし皆、白雪家の飼つている『悪魔』の話をすれば、無かつたことにしてほしいと、そういうつて逃げました」

「……なるほど」

「ですから、あなたは白雪家が怖くはないのですか？ また、その理由は？」

男は不敵に笑い、そして答えた。

「『悪魔』？ そんなもの、人間に比べれば可愛いモノだよ。人間の方がよっぽどおぞましい」

「…………」

「『悪魔』を畏れていては、國は良くならない。だから私が引導を渡そう。『悪魔』を殺し、白雪姫を追放し、この國の礎を築こう。犠牲は付き物だがな」

第一章 ～意地悪の悪戯～ 4

いつもの屋上。いつもの昼休み。

白雪は特に隠す素振りも見せず、唐突に話し始めた。

「最近巷で強盗事件が頻繁に起こっていましたよね？」

「ん？ ああ、そう言えばそうだな。それが？」

「実は、その犯人達の処罰を私に求めている人がいたんです。知つての通り、私の家は裏にも表にも影響力がありますから、私がそれを処罰しろと言えば、処罰されるでしょう」

「……で、白雪はどうしたんだ？」

「私はそれを許可しました。恐らく、私の家の手が回っている組織が、犯人達を処罰すると思います。これで強盗事件は收まりますよね？」

「……そうだな」

「私は、良い事できましたか？ 良い国を作れていますか？」

「ちゃんと良い国になつてているさ。強盗事件も止まるだろ？」

しかし白雪は顔を曇らせて言つ。自分の言つていることを、自分では信じられないように。

「……私の決断は、悪くなかったんでしようか？」

「大丈夫、白雪は悪くないわ」

悪いのは、あくまで僕だ。

だから、白雪はそんな泣きそつた顔をしないでほしい。白雪は笑つている顔が一番だから。

「よしよし」

なんとなく白雪の頭を撫でてみた。白雪の黒髪は、縄のような肌触りで心地よかつた。

「……ん？ なんか間違つてている気がする。」

「…………」

数秒ほど経つてから、我に返ったのか白雪が僕の手から逃れるように離れた。頬を紅潮させ、恨むように睨んでくる。

「……先輩、セクハラで訴えますよ？ 罰金と懲役、どちらがいいですか？ 今なら好きな方を選ばせてあげますよ？」

「無罪放免で」

冤罪でもないのに無罪を主張してみた。きっと誰も弁護してくれないだろう。

「…………解かりました。しそうがないですね」

小さく溜息をつき、本当にしようがない人だ、といつ白雪。判決は無罪。あれ？なぜか恩を売られた気になってしまつ。「今回だけ、ですよ？」

そう言って、僕の方に頭をコテンと倒していく白雪。

ほんのりと白雪の髪から優しい香りが風に流されて、僕の嗅覚を刺激する。白雪の短めの髪が僕に触れてくる。

「え？あの、白雪さん？」

「先輩、今回だけですかね？ 今度似たような事をしたら、兵役に一年か懲役に五年、もしくは秘密のお仕置きの嫌な方を選ばせてあげますよ？」

秘密のお仕置きってすゞしく気になるけど、それより今回だけってどういう意味なのだろう。

誘つているのだろうか？ それとも、?????のだろうか？ そんなはずないだろうに。何を考えているんだか、僕。僕は言つ。

「…………」

何も言えなかつた。

けれど、これで本当に良かつたのだろうか？

少年達は強盗で、それを裁く許可を白雪は出して、僕はそれを殺

した。

本当に、これで良かつたのか？  
白雪、僕にはそれがわからない。

## 第一章 ～意地悪と悪戯～ 4（後書き）

とりあえず、これで第一章は終わりです。  
Wordで作成しそれを移した形なので、多少変な部分があるかもしれません……。

当初は、『＊』で区切って、一話にする予定でしたが、どうでしょうか？

## 第一章 ～悪魔～（前書き）

今回は、思い切って一話を長くしてみました

## 第一章 ～悪魔～

### 第一章 ～悪魔～

「白雪は、悪魔はいると思つつか？」

「悪魔、ですか？ もしかして先輩、私の家に伝わる尊のことですか？」

白雪は少しだけ怪訝そうに小首を傾げながら尋ねる。

そんなところだな、と僕は答えておく。まあ、実際そうだし。

『白雪家に歯向かう者は、奴らが飼つている悪魔に殺される』という風説がある。

それが悪魔の仕業なのか、ただの偶然なのか、真偽の程は定かではないが、国を動かせる白雪家に反感を抱いてた者達が不慮の死を遂げているのは事実だ。

しかし白雪は言つ。

「悪魔なんていませんよ。確かに家に反感を持つた人が死んだりしましたが、でも未だに反感を抱く人がいる以上、悪魔もいないと思います。本当にいるのでしたら、そう言う人たちもあその悪魔にやられて存在しないでしょ？」

それに、と白雪は付け加えて言つ。

「『奴ら飼つている悪魔』と言いますけど、私はそんなもの見たことありませんから。見たくもありませんし。そして何より、悪魔は飼つのではないか。契約するものだと思います」

「……それはそうだな」

生返事をしながら、僕は思つ。

白雪は知らなくて言い話だ。例えば、その『悪魔』がただの隠喩だと言つことだとか。『悪魔』が悪魔と呼ばれるに値する、悪魔らしい働きをしていることだとか。

白雪は知りなくていい。

知られては、とっても困る話だ。

「でも、本当はこのかもしれませんね……」

しかし、白雪はどこか遠くを見るようになってしまった。

「だから、私は不幸なかもしれません。……『悪魔』を飼っているから」

「……白雪？」

白雪の表情は翳るばかりだ。

「お父さんは、どうして突然いなくなってしまったんでしょうか？」

私にも何も言わず、それこそ消えるように

そして、白雪は言った。

「まるで、悪魔に消されたみたい」

白雪の顔は悲しみに染まっていた。そして、微かなじりじりもない思いが滲んでいた。

「……白雪は、お父さんのこと、好きだったのか？」

僕の質問に白雪は、どうでしょう、と小さく笑った。

「私が小さい頃にお母さんは病氣で死にましたから、本当の家族と呼べたのも、お父さんだけです。だから、……やっぱり好きだったのかもりません」

それなら、きっと。

唯一の家族を失った時、それも何の前触れも無く消えてしまったその時、白雪はどう思つたのだろう。僕にはわからない。

「……白雪。まだ死んだと決まった訳じゃないし、探したりしないのか？」

白雪は凜として答えた。

「はい。探しません」

「え？ どうしてだ？」

それは、少々予想外の答えた。てっきり、今も血眼になつて

探しています、とか言うと思つたのだけれど。

そんな僕の思考を読み取つたように、白雪は言つた。

「突然消えたのは、きっと、お父さんの望んだ結末だと思うからです。きっと、何か思う事があつたんだと思います。私に何も言わなかつたのも、きっと何か意味があるんだと思います。だから、探しません」

「……そつか」

それは、寂しくないのか？ と訊こうかと思つたが、先輩がいるから寂しくありません、とか言われそうな気がするので止めておいた。自意識過剰な気もするけど。

「……白雪は強いな」

けれど、白雪は俯き小さく呟いた。

「私は……強くなんか……ありませんよ」

それは、僕に取つては、深い意味のある言葉だった。

\*

その日は、雲の無い夜だつた。夜が明けようといつ時刻だつた。そんな環境だつたから、科学者達はその誘いに乗つてしまつたかも知れない。

「……お前。一体何が目的なんだ？」

科学者達は、仮面の男に尋ねる。

夜の闇に紛れるような、真っ黒の仮面で口元から上を隠す男。うつすらと笑みを浮かべているように見えた。

「目的？ そんなもの、未来の生活の向上、科学技術の躍進以外に何がある？」

科学者達は訝しみ、顔を見合わせる。そして、仮面の男に尋ねる。

「…………だが、悪魔の技術だぞ？」

仮面の男は小さく笑い、断言する。

「心配するな。全ての責任は、私が持とう。あなた達の考えは解つ

ているつもりだ」

「………… 本当、 だらうな？」

男はふっと笑い、 手を差し出す。

「勿論だ。 信じる者を救おう。 ?? いや、 信じぬ者も救おう

科学者達は男に手を差し出した。

そして男は、 科学者達に島を与えた。

その数刻後、 とある小さなビル。

男の元に、 一人のスース姿の女が現れた。 女は目を伏せ、 男の顔を見ずに尋ねる。

「………… 計画は順調、 と言ったところですか？」

男は手で一丁の銃を弄びながら言う。

「ああ。 彼らの協力なくしては、 新しい国家は作れない。 …… 少々、 別のところを感じかれたかもしれないが、 恐らく核心は突かれていなかろう。 君に危害が及ぶ事は無いはずだ」

それは銀で作られた銃弾が込められた銃。

「………… そうですか」

女は相変わらず目を伏せているが、 男は何かに気付いたようだ。 銃をデスクの上に置き、 表情の解らない仮面の顔を傾ける。

「心配か？」

「いえ。 私はあなたを信頼していますから」

女はすぐに素っ気なく答える。 その答えに、 一切の迷いはない。

男は満足そうに頷く。

「だろうな。 現状では、 自らの信愛する主を裏切るような状態だからな。 信頼を寄せられないような男にはついて来ないだろ？」

「ですから、 この計画は悟られてはならないのです」

男は、 そうかと頷き、 そして女に言った。

「あとは奴の動き次第だ。 『悪魔』 を殺す方法は、 既に我が手の内にある。 それで全ては終わり、 始まるだろ？」

再び男は銃を取り、 それを掲げる。

「シルバーブレッド、なんて洒落込むつもりはないがな……」「？」

女は首を傾げ、そして男に訊いた。

「シルバーブレット……ではないのですか？ ブレッドでは、パンですよ」

\*

とある屋敷の一部屋で、男と人影は話していた。

「今回の任務、我らがお嬢様の命だ。受けてくれるな？」

「……お嬢様が望まれることなら」

「よろしい。お嬢様のために、その力を振るえ」

「はい」

「今日は、島一つを消してほしい」

「……島一つという事は、島に住む住人を全て、という事ですか？」  
「正確には住人ではない。元々は無人島なんだよ。そこに今、テロリストが潜伏している。彼らを狩つて欲しいのだ」

「……それで？」

「今日は、島の物を一切傷つける事無くやつてほしい。君ならば簡単だらう？」

「……島のモノ、機械や施設を傷つけずに、と？」

「…………、そういうことだ。明日の夜、飛行場に来てくれ。島まで送るわ」「うう」

「……わかりました」

影が消え、男は言う。

「ちつ、これだから冴えてる奴は。ただ言われたことだけ忠実にやるから良いものを」

そして男は笑みを浮かべて言った。

「それも、今までだ」

そして、その男の呟きをその人影は聞いていた。

『国舞島』と呼ばれる島だった。

数年前まで無人島であったため、今でも島の大半は豊かな自然に囲まれている。島に平地は殆ど無く、標高三百メートル程の山を中心としている。

そんな島の中で唯一の人工物である建物に、男達はいた。四方が森に面した二階建ての建物で、何かの施設のように見える。場所は島、もとい山の中腹よりやや高めにある。男達は何が来るのが解かっているかのように、銃器で武装し見張りをしていた。それを高度五百メートルの位置から眺め、人影は眩いだ。

「あれが今回の目標か……」

小さな飛行機が、その島の上空を飛んでいた。黒の機体には何も描かれておらず、それが『悪魔』とも呼ばれる組織の所有する機体だとは世間には知られていない。

そして、その機体の操縦士は人影の問い合わせに答える。

「はい。『国舞島』と呼ばれる、現在、公式記録上では無人島となつていてる島です」

そして操縦士は、決り文句のようにそれを言つた。

「我らがお嬢様のため、その願いを叶え、この国に永遠たる幸福を」として、飛行機のハッチが開き??、

飛行機は爆発した。

正確に言つなら、撃墜された。

島の中央部、施設のような建物から、眩い光の筋が放たれ、その光は飛行機を直撃し、翼を貫通し融解、爆発させた。

島の施設内ではこんな会話がされていた。

「レーザー砲、着弾確認。レーダーには何も映りません。撃墜しました」

「やったかー?」

色めき立つ同士を前に、リーダー格の男はこう言った。

「……いや。そんな簡単には行かないだろつ。……奴らが、来た」

また、『悪魔』と呼ばれる組織の本部では、こんな会話がされていた。

「機体の撃墜確認。操縦士、狗の生存確認はとれません」

「……そうか。やはり、こうなったか。まあ、そこまで行ければ上出来だ」

「どうしますか？」

通信役の男は、いつも狗に命令を出す男に尋ねた。

「……、予定通り明朝に島に着くように船を出しておけ」

「はい」

「…………」それくらいで奴が死ぬのなら、我々も苦労しない

そして、島の上空ではこんな会話がされていた。

「……レーザー砲、か。始めて見た」

「おいおい、こいつ折角助けたのに気絶してるぜ？ まあ、レーザー砲が直撃したら、普通ならこうなるか、……。死のイメージってやつ？」

「しかし、テロリスト、ねえ。どこかの秘密結社か？ オーバーテクノロジーもいい所だよ」

「それはお前だろ？ 悪魔のような力を持つた、『悪魔』と呼ばれる組織の人間。おつ、森の中にも何人かいるみたいだな。随分とまた、厳重に守つてますこと。それほど大事なものがあるんだろうな」人影は二つ、声は一つあつた。どちらも大人とは思えない声だった。

二つの人影は共に重力に従つて落下している。しかし、どうにも一人は気絶しているようで、その人影はピクリとも動いていなかつた。その一人はスースツ姿で、操縦士だった。

もう一人は、全身を包み込むような漆黒のマントを着ているように見える、青年を黒で染めたような、人影だった。人影は操縦士を

右手で掴み、左手の腕時計で時刻を確認。長針は午前零時を回ったところだった。

「時間はたつぱりある。シェイド、お前の力は僕の力だろ?」

「そうだな。契約者のお前に俺は力を与えた。……ただ、それだけだ」

人影と操縦士は重力に従つて落下していく。そして、地面に激突する寸前でそれは止まつた。

人影から、翼が生え、羽ばたいていた。

それは?? 悪魔の翼だった。

先ほどまではためいていたマントが、翼に変わっていた。闇のようないい黒さを持つ翼で羽ばたきながら地面に静かに着地し、人影は咳く。

「白雪姫の幸せを『悪魔』は願おう」

\*

「あなたは神を信じますか?」

実際に馬鹿げた質問だと、僕は思った。

ソイツは僕に向かつて、確かにそう言つたのだ。

僕は答える。

「信じなければ救つてくれないような神様を、僕は信じてはいない。信じているのは、僕が幸せを願つた人が幸せになれる、ということだけだ」

ソイツは言つた。僕が心のなかで思つた事まで、見透かしたように。

「……実際に、最高な答えじゃないか。自分を犠牲にしてまで幸せにしたい、なんて」

「…………」

じゃあ、とソイツは僕に手を差し出す。

「これは悪魔の契約だ。俺はお前に力を与えよう。？？お前が望んだ物を俺は与えよう」

僕は迷う事無く、その手を取った。

ソイツ、黒猫の手は柔らかかったが、しかし頼りになる手だった。黒猫と手が結ばれた瞬間、辺りが暗闇包まれる。闇に飲まれるよう、僕の視界は消失した。

「俺は影の悪魔、名前はシェイド」

どれくらい時間が経つたのか解らない。目の前が真っ暗だが、不思議と自分の体は見える。そして、ソイツは現れた。黒猫ではなく、人型だった。

少年のような背丈で、悪戯小僧のよつたな印象を与える顔立ちだった。

悪魔、シェイドは言う。

「俺は影、実体は存在しない。好きな形に体を変える事が出来る。黒猫だろうが人だろうが、あるいは物、例えばマントとか」  
シェイドの格好が黒猫、人と変わり、マントとなつて僕を包み込んだ。それは一次元の存在のように薄いが、確かにマントだった。

再び人型に戻り、シェイドは言う。

「これは悪魔の契約。俺はお前に力を与える。お前は俺に魂を売り渡す」

青白く光り輝くいかにも人魂のような物を右手に出し、地獄を思わせるような煉獄の炎を左手に出す。

「お前の魂、解かりやすく言うならば、寿命量に応じて俺はお前に望むものを与える」

人魂と炎を消し、シェイドは僕に指を指して言う。

「お前の魂が尽きたとき、それがお前の死ぬ時だ。よく考えろ」

悪魔は僕に光り輝く何かを投げてよこす。

「それは契約の証、そして魂の残量を記す物だ」

それは黒の懷中時計だった。ハンターケース型という、一枚貝の

ように蓋が取り付けられているタイプだ。表面には『A9』の刻印。

『A9』『悪魔』といふことだらうか。もしくは、『永久の間』かもしれない。

どちらにしろ、悪趣味な装飾だ。悪魔だけに。

「忘れるなよ、相棒？ これは悪魔の契約だ。悪魔が、なぜ悪魔と呼ばれるのか、それを知らなければこの契約に意味は無い」音声がフュイドアウトして行く。……これが噂の精神世界というものだったのか？

気がつけば、いつもの屋上だった。

一見何も変わっていないように見える僕の体。実際、一点を除いて何も変わっていない。

僕の右手に握られた懐中時計が、日光で黒光りする。全ては動き出す。

僕は懐中時計を開け、中を見る。

数字は零から九まであり、針は全部で三本。だが時刻を表す時計ではない。今現在、『百』と書かれた三本の中で一番長い針が九を、中くらいの『十』と書かれた針も九を、一番短い『一』と書かれた針もまた九を指していた。

九百九十九、それが僕に残された魂の残量。

僕は悪魔の言葉を思い出す。

『悪魔が、なぜ悪魔と呼ばれるのか、それを知らなければこの契約に意味は無い』

僕は言つ。

「馬鹿だな。いや、優しいのか？ お前がそんな事を言つてしまえば、答え同然じゃないか」

『？？優しい？ はき違えるなよ？ 僕は魂をもらい、お前は望む物を得る。ギブアンドテイク、俺達はそういう関係だ。』

悪魔の声が脳裏に響く。なるほど。いつでも呼び出せる、という

訳か。

良く自分の影を見ると、形が変わっている。僕自身の影から、猫の形の影がでている。だが、そこに猫はいない。かと思えば、影のない猫が現れる。

「なあ、悪魔。僕はお前をこき使つぞ?」

猫は言つ。

「いいぜ。ただし、俺は悪魔だ。思い通りに動かせると思つなよ? ??これが『悪魔』の理論だろ?」

『これは悪魔の契約だ。俺はお前に力を与えよう。??お前が望んだ物を俺は与えよう』

悪魔、お前は実に良い奴だ。いや、悪い奴というべきか?

お前は僕に力を与えてくれた。ただし、それは契約のおまけだ。力を与えるのが契約ではなく、僕に望んだ物を与えるのが契約なのだ。

悪魔の力を使う分には、魂は消費されない。

『悪魔が、なぜ悪魔と呼ばれるのか、それを知らなければこの契約に意味は無い』

その答えはやはり、何かに対して悪であるから、悪魔なのだろう。何に対しても悪なのか、そしてこの契約の意味は??。

悪魔に対して、悪い契約だろ?。

\*

銃声が島に木靈していた。

「嘘だろ!?

サブマシンガンを撃ち終え、男はそう言つしかなかつた。確かに、銃弾はその人影を捕えて、貫通していた。だが、その人影は、何事も無かつたようにそこに佇んでいた。人影は、あくまで

影であるかのように。

そして、サブマシンガンの弾が切れたと悟った人影は腕を伸ばし、佐々木をその闇に飲み込んだ。

施設内では、こんな会話がされていた。

「駄目です！ 佐々木、草野、白鳥がやられました！」

「情報を集めろ！ 何かトリックがあるはずだ！」

「奴に銃は効かないみたいですね！ そして、奴に触れられた場合、助かる見込みは無いと……」

絶望に染まりつつある仲間達を見て、リーダー格の男は言った。  
「ポイントGに誘い込め。それで倒せなかつた場合は、我々も腹を括ろう」

「しかし、まだアレがあります！ いくら何でも、アレで死なないはずは？？」

しかしリーダー格の男は最期まで言わせず、こう言った。

「それでは駄目なんだよ。それでは、あの男と同じではないか。… 我々の目的を忘れるな」

爆発音が島を埋め尽くさんばかりに鳴り響いていた。

その爆発音に追われるよう、人影は島を移動していた。

人影を追うように爆発音を響かせていたのは、地雷だつた。大量に埋められた地雷が近くの地雷を誘爆させ、人影を感知しても爆発を起こし、断続的に爆発音が鳴り響く。

常人ならばその爆発の中無傷で移動できはしなかつただろう。爆発によつて飛来した木々や石片で傷ついていただろ。だが、その人影はその全てを受けて尚、傷ついていなかつた。

受けた、それを貫通させていた。

ホログラムのように、実体など無いように。

それでも、そんな人影も、地雷の爆発を直接受けるのはまずいのかもしらなかつた。

地雷に追われるよう移動していた人影が、安全を求めて逃げられる場所は一箇所しかなかった。いや、これだけ爆発がおきながら安全な場所があつたという方が奇跡的だろう。

そこは、背後に岩壁がそびえ立っている、自然の袋小路だった。そして、そこは坂の底辺に位置していた。

背後の岩壁に遮られるように、もう逃げ場は無い。

轟、と爆発音が人影の四方八方から聞こえた。

そして、坂を形成していた土砂と岩壁が雪崩落ちて来た。

「土砂崩れか！」

人影は呻き声を上げた。地雷は無意味に爆発したのではなく、相手をこの場所に誘い込み、そして土砂崩れに巻き込むためだつた。相手が機械や人間だつたのならば、この作戦も効いただろう。だが、相手は機械でもなければ人間でもなかつた。

『悪魔』だつた。

もはやかつての島の原型は崩れていた。その場所は、岩壁が崩れ土砂と混じり合つている。

そして、そこを三人の男が銃器を片手に何かを探すように移動していた。

「いたか？」

「いや、見当たらぬぜ。主任、やっぱリアンタの言つた通りだつたのかな」

「そうかもな……」

そう言つて、三人はリーダー格の男が言つた言葉を思い返した。

『奴が銃弾を貫通させるのはもはや事実と受け止めよう。だが、奴はその際必ず止まつている。つまり、移動と全てを貫通させる事は同時には行なえないのではないか？』

一人が言った。

「さすがだな。俺達には考え方ねえよ、そんな事。銃撃が効かない時点で俺は諦めるぜ」

もう一人も言う。

「ああ、だからあの人俺達はついて行こうって決めたんだ。あの人の言うことは正しい」

そして、一人が言った。

「……なるほど。『影還し』??この能力にもそんな弱点があったのか」

最後の一人は、『悪魔』だった。

「だが、僕の能力はそれだけじゃない」

そして、二人は反応し振り向き様に銃の引き金を引いていた。それは人影を貫通??せず、当たりもしなかつた。

一人が引き金を引いた瞬間には、人影は一人の目の前まで来ていた。それは、おおよそ人間の動きでは無かつた。

「『魔憑き』??悪魔の動きにはついて来れないだろ?」

人影の動き全ては、黒い粒子を残留させる。

人影の腕が振るわれたとき、既に二人の体をその腕は貫通し、腕の後を追うように伸びた黒い粒子の軌跡が二人の首を繋いでいた。その動きは、悪魔の動きだった。

「もはや、ここまでか……」

施設の最下層で、リーダー格の男はモニターを見て唸るように咳いた。

施設の防犯装置、レーザー光線をマントが無効化し、釣り天井が作動した瞬間にはもう釣り天井の下にはいない。

「そもそも、上空五百メートル付近でレーザー砲を喰らっても無事でいたのだ。ある意味当然の結果とも言える、か」

男の前には、人影がいた。

人影は、漆黒のマントで身を包み、照明の下だというのに顔は影の

ように黒く見えない。

「この……悪魔が」

人間でない者を相手に、勝てるはずはないと言わんばかりに男はそう吐き捨てた。

そして、その手刀が彼の首を突き抜けた。

「……僕は？？ 犬だ。だから、これでいいんだ」

人影は頭に手を添え、唇を噛み締めて言う。

「白雪は正しいんだ。？？ 間違っているの、僕だ」

人影は、その頬を伝う涙を拭つた。

\*

いつもの屋上、いつもの昼休み。

「知つてますか先輩？ 原子や分子レベルから食材を作る技術があるんですよ？」

「へえ、初耳だな。すごい技術じゃないか」

「ただ、その技術を開発した科学者のいる研究所が、テロリストに占拠されてしまつたんですよ。このままだったらその技術が悪用される、という話があつたんです」

「……それで？」

「テロリストの鎮圧を私は許可しました。最悪、科学者やその技術が失われてもいいとも言いました。原子や分子レベルでの物質の構成ということは、逆に分子や原子レベルにまで簡単に分解する技術もあるという事です。それが悪用されると言つ事は、凶悪事件が増えてしまいます。だから私は未来の生活の向上より、現在の国民の安全を優先してそう決断しました」

「……そつか」

「私は、酷い女ですよね。……人の命を数で数えるんですからどこか憂いを含んだ顔を見せる白雪に、僕は即答する。

「そんなことはないよ」

「……そうですか？」

白雪は笑つたが、その笑顔に霸氣はない。

だから、僕は、そういう顔を見たくないんだ。

「白雪は優しいわ」

「え？」

「白雪は優しい。誰かが死ねば悲しめるし、傷つく痛みを知つていいからな」

そう、白雪は優しそう。触れてはいけないような優しさ。残酷なくらいに優しい。

白雪はふつと僕から顔を背ける。肩を震わせている。やばい、あまり慰めにならなかつたかな。

白雪は僕の顔を見ず俯き、肩を震わせながらぽつりと呟いた。

「先輩は、優しいですね」

僕は俯きながら呟つ。

「…………そんなことは、ない」

優しくなんか無い。僕は、優しくなんか無い。例え優しかつたとしても、それは優しい顔の仮面を被つた、悪魔のよつた偽善者だろう。

「…………僕が誰かに優しいのは、誰かに優しくないからだよ」

「はい？」

僕の呟きは白雪には聞こえず、白雪が不思議そうに僕の顔を見る。

「先輩、なんて言つたんですか？」「

「…………教えない」

「教えてくださいよ！」

そう言つて、俯いていた僕の顔を下から覗き込む白雪。子猫のような無邪気な瞳。そして、

「なんて言つたんですか？ センパイ、教えてください」と  
ぐはつ。

なんだろう、台詞自体に大した脅威は感じないので、このシチュ

「ーションはやばい。」と、いうか、口説が台詞なだけにしつこく聞かれる」と困る。

「せんぱい？」

小首を傾げ、僕の目を覗き込む白雪。小動物のような印象。

やばいやばいやばい！ 本当に何かが崩壊屈折支離滅裂してしまった。世界がどうにかなってしまいそうな、僕の心が折れてしまふ。終いそうな！ めでたしめでたしみたいな！

どうして僕は、『下から田線おねだりボイス』にこんなにも弱いんだ。こうなつては何も反抗できない。自分の無力を呪いたくなる。いや、既に呪われているか。

「あ、えっと、その……」

もう何も言わない訳にはいかない。しかしどうしよう、まさかもう一度アレを言つわけにもいかないし。働く、僕の頭脳。

その間にも、白雪の視線が僕の目に突き刺さる。ビ、ビツしてこうなつた。普通、あんな台詞は何事も無かつたように聞き流すだろ。そして、悪魔のような閃きが苦し紛れに浮かび上がり、僕はそれを言つた。

「？？白雪は可愛い、って言つたんだよ」

「はいっ！？」

白雪が顔を赤くして、目をパチクリする。ついでに口もパクパクさせる。

。

本当に可愛い。

「えっ、あのっ、それって、え？」

この機会を逃してなるものか。僕は時計を見て、

「じゃ、そろそろ僕は教室に戻るよ」

と言つて白雪に背を向けて手を振り、屋上から颯爽と出て行く。それは逃走だった。自由への逃亡、言い逃げだ。弁解すると……、恥ずかしかったから。

……、僕は意氣地なしです。

そんな僕でも、やらなければならぬ」とがあるが。

「白雪。……これじゃ駄目なんだよ」

\*

「ンンン、とドアをノックする音が鳴る。

国を動かすお嬢様の住むお屋敷。そのお嬢様のいる部屋のドアを、大臣は静かにノックした。

「はい。どなたですか？」

大臣は名を述べ、用件をドア越しに言つた。

「お嬢様、少々問題が発生しました。組織に？裏切り者がいました」

そして大臣は、その裏切り者の写真をドアの隙間から入れた。それを見て、お嬢様、白雪奈美は息を飲み、静かに言つた。

「……詳しく、お願ひします」

「ふるふる」と備え付けの電話が鳴る。

仮面の男は静かに電話を取る。彼がいるのは、いつものビルだった。

「もしもし」

『私です』

男はいつも女の声に、少し口調を和らげて言つ。

「君か。……どうした？ 例の計画に、何か問題でも？」

『そうではありません。……明日、計画を実行できそうです』

男は口元を歪めたが、醸し出す雰囲気が一瞬だけ変化を見せた。それは、どこか悲しげで、自嘲的なものだった。

「……そつか。それなら私もすぐ動こう。予定通り動かしてくれれば、『悪魔』狩りは成功するだろ？』『悪魔』といつても、人間だからな」

『……あなたはなぜそれを知っているのですか？』

「疑うのか？まあ、仕方がないか。……しかし、これは確かな情報だ」

『……勿論、これまであなたの事を信用してきたのですから、今更疑うような事はしません』

「そうか。それなら、明日は指示通り動いてくれ。それで全ては終わる』

『……本当にお嬢様は、それで……』

「間違いないだろう。いや、これは君のアイディアだらう？私も今更君のことを疑おうとは思わないよ』

『そうですか。……しかし、本当に『悪魔』を殺せるのですか？奴は影のように何も受け付けず、消えるように移動し、忍者のように分身し、触れただけで殺します。……本当に悪魔のような人間なのですよ？』

「心配か？だが、私はやらねばならないのだ。今までは、駄目なのだよ』

仮面の男は言つ。

「私はもう戻れない場所まで来ている。だが、君はまだ戻れる場所いる。だからあえて問おう。

？？君が望むものは何だ？」

『…………あなたは、何者なんですか？』

女は男の問いには答えず、逆に問うた。男は静かに答えた。

「悪魔だよ。誰よりも悪い、最低最悪の人間だ」

しかし、女はそれを無視してこう言つた。

「…………白雪、月夜様ではないのですか？」

「…………」

しばし沈黙し、一度息を吐いてから男は答える。

「奴は死んだよ。奴はこの国の闇、『悪魔』に殺された。……これは、ある意味奴の遺志を継いだ戦いかもしれないな」

女は再度尋ねた。

「……あなたは、誰なんですか？」

それに男は答える。

「私の名は、信玖人義」

男、信玖人義は言った。

「私は『悪魔』を殺そう。『悪魔』にいかなる理由があつとも、

私はその存在を許さない」

## 第一章 ～悪魔～（後書き）

どうでしたでしょうか？

戦闘シーンの表現がうまくできない、と作者は思っていますが…。

## 第二章 ～終わりから始まり～

### 第二章 ～終わりから始まり～

「白雪は、騙す側と騙される側、どちらが悪いと思う?」

「それは、騙す側ですね。騙す側がいなければ、騙される側はいませんから。でも、騙される側も悪い場合もありますけどね。例えば、『あなたを幸せにするので百万円ください』といった感じです。何でも信用しては駄目です」

「そつか。じゃあ、いじめる側といじめられる側だったら?」

「それも当然、いじめる側ですよ。どんな理由があつても、いじめはいけません。いじめた人の将来と自分の将来を駄目ににしてしまいますから。苛ついたら、その人の苛つく所を治してあげようとするべきです」

「でも、間違つていると解つていっても、止められないことだつてあるだろ? 白雪はどう思う?」

「そうですね。でも、それはその人が弱いだけだと思います。そういう人は、誰かに止めもらひしかないんでしょうけど」

「…………白雪は強いな。それに、優しい」

「それでもないですよ?」

「え?」

「仮に、殺した方と殺された方では、どちらが悪いのか考えると、私は答えられませんから」

「…………」

「普通に考えると、殺した方が悪いような気もしますが、けれど、相手に殺意を抱かせるような人間だから殺されたと考えれば、私は??。勿論、殺人鬼のような目的も無く殺す人は別の話ですが……」

「…………やっぱり、白雪は優しいよ」

「え？」

「白雪は、人を殺した人間を許容できる奴だ。生きている人間を大切に思う。……それはやつぱり、優しいんだと僕は思う」

僕はその優しさが？？眩しい、怖い、痛い、辛い、苦しい。

その優しさは、『悪魔』の僕には体を貫かれそうなくらい刺々しい。

優しさが、優しくない。

「……先輩。先輩は、私に何か隠してませんか？」

と、白雪は僕の顔を覗う。むづ、表情に出てしまったか？

いつものような純粹な子猫のような瞳ではなく、どことなく濁つた瞳だ。

隠していることは、知られたくない事だ。

「白雪？ 何を言つてるんだ？ そりや僕だって、人に隠したいとの一つや一つあるけど」

大げさに肩をすくめてみせる僕。

けれど白雪は僕の巫山戯た態度など気にせず、僕の目を見て言つ。「そうじゅありません。…………先輩は、何か私に関する隠し事をしていませんか？ 困つてることがあるなら、私に相談してください」

だから、その優しさは？？。

僕が触れていい物じゃないんだよ。

「…………何も。何も相談する事は無いよ。……僕の問題は、僕自

身で解決する」

僕は屋上を離れる。白雪は何も言わず、ただ僕の背中を見ていた。背後に聞こえる屋上の扉の閉まる音が、なんだか不吉な音に聞こえた。

と、屋上を離れてから僕は気がついた。

「…………そつか。今までの白雪も、…………こんな気持ちだったのかな無理矢理何かを隠そつとする」の感じ、……あまり良いものじゃない。

だけど、過ぎ去ったことは過ぎ去った事。

変えられない過去を悔やむより、僕は未来を変えるための努力をしよう。

「誰もいない」とを確認して、僕は悪魔に語りかけた。

「……今日は忙しくなる。いままでありがと、シハイド」

悪魔の声が脳裏に響く。

「ちちらこそだぜ、ミトモ。今まで楽しかったよ。そして、これからも宜しくな。

僕は頭を搔く。なんだよ、この親友みたいな返事。

「お前は悪魔なんだろ？ それなら、もつと悪魔らしくしろよ」

悪魔は笑つて答えた。

「お前だつて『悪魔』だろ。

その通りだつた。

\*

夜の帳が降りた。雲は月を隠す。国の主が住む屋敷だ。

全てが、始まり、終わりを告げる。

「今回の任務は、裏切り者の始末だ」

男は、狗と呼ばれる人影にそう切り出した。

「……裏切り者？」

「そうだ。組織の中に裏切り者がいた。……その者の行ないにお嬢様は」立腹だ。そして、肅正の許可を降ろされた

「……」

「お嬢様のため、やつてくれるな？」

「……」

人影は黙り、返事は無い。

「お嬢様のためだ」

再度男は繰り返した。懷に手をやり、何かを握った。

「死ね！」

銃声が部屋を駆け巡った。

男は自分の銃口から出る煙と、その延長線上にできた銃痕を見る。「つぐづく勘のいい奴だ。いや、元々聰明な奴なのだろう。だが馬鹿でもある。だからこそ、我々に取っては、もはや脅威なのだよ。手のつけられない狗は必要ない」

人影は部屋から消えていた。男は無線でそのことを部下に知らせ、警戒態勢を敷く。

「奴を発見次第、例のポイントへ誘い込め。奴は自分の能力を過信している」

「無線を切り、男は呟くように言った。

「奴は狗ではなく、猫だ。自由気ままな黒猫だ」

『悪魔』狩りが始まつた。

屋敷の至るところで鳴り響く銃声。

それを白雪のいる部屋のドア越しに聞き、白雪の側近、咲は白雪に説明をする。

「……今、例の裏切りの者が屋敷内に侵入しております。着実に追いつめておりますが、念のために、どうぞこれを」

白雪にソレを渡す。

「…………」

白雪はソレを無言で受け取り、握りしめる。

それは、信玖人義の持っていた銃。シルバーブレットの入った、一丁の銃。

そして、白雪は咲の顔を見て呟く。

「咲、私は……」

咲は主の言葉を聞き、そして呟いた。

「…………お嬢様が望むのでしたわ。……私は何も言いません」

白雪は小さく笑い、頭を下げる。

「咲、…………ありがと」

「いえ。…………では、気付かれる前に」

そして、白雪と咲は部屋を出て行つた。

銃撃に追われるよう人に影は移動していた。着実に人影はある場所へと誘われていた。

そして、遂に人影は追いつめられた。眩い光が、人影を照らした。背後に屋敷を囲む塀、人影を囲むように三十人の黒服。それは人影と同じ組織の人間だ。

『悪魔』と呼ばれる組織の、悪魔じやない人間。

その中から一人の男が出てくる。

それは、人影に命令を出していた男だつた。

「ここまでだな、狗」

狗と呼ばれた人影は、眩いばかりの光に当たられながら、その姿を明確に認識させない。

全身が黒に染められた人の輪郭、そうとしか認識できなかつた。組織の人間もその姿を見るのは、初めてだつた。

いつだつて、狗と出会うのは暗闇の中だつたから。

だから、狗がそんな姿をしていることに多少は驚いた。

驚き、納得した。

奴は、本物の悪魔なのだと。人間ではないのだと。

「貴様の裏切り行為、我々は見過ごす訳にはいかない。だからここで大人しく??」

男は銃を狗に向ける。狗は、微動だにしない。

「死ね」

銃声がなり、狗は消し飛んだ。

そして、

「……どういう事だ？　なぜ、奴はいない……」  
ざわめきが生まれた。

狗は、銃弾を受け塵のように消えた。まるでそれは本体でないようだ。

影分身のように。

だが、男は慌ててはいなかつた。男はすでに、この後に起じる事を知つていた。

\*

「問題ない。ここまで順調だ。奴がここから逃げるための道は一つしか無い。そして、絶対に抜けられない道だ」

信玖人義は笑みを浮かべる。いつものビルに彼はいた。

そのガラス張りのデスク上には、『悪魔』達が使つていた無線。彼の右手には、小さな小型の通信機。

「奴が人間かどうかなどどうでも良い。もしかすると、本当にこの家が飼つている悪魔なのかも知れない。だが、我々の目的は奴がどんな者でも変わりはしない。奴を殺せばそれでいいのだ」

信玖人義は、通信機にそう語る。

相手は何も言わない。というより、一方通行の通信機だからだ。「奴が銃撃を避けると言つのなら、避けられない状況を作れば良い。奴が消えるように移動すると言つのなら、出て来たところを叩けば良い。奴が影分身のように分裂するなら、本体を殺せば良い」

信玖人義は、まるで全てを知り尽くしたように語る。

「奴の行動は、必ず何かのためだろう? それならば、容易く足止めできよう。そして、彼女なら容易く仕留められるだろ?」

「白雪お嬢様なら」

\*

狗と呼ばれた人影は、既に屋敷に背を向けていた。

そこは、屋敷唯一の出入り口である、絢爛さと威儀を兼ね備えた門の外側。

影分身を『悪魔』達が追いつめている間に、人影は堂々と門をく

ぐつた。

人影は、裏切り者と呼ばれ殺されそうになつたことに驚きはしなかつた。

むしろ、それは遅すぎるくらいだと思つていた。

人影は自分の影へと呴いた。

「僕は……裏切り者だ。殺されても、何も言えない。だが、簡単に殺されるわけにはいかない」

影は答えた。

「……お前は裏切つた。他でも無い、お嬢様の命令を。だが、お前は悪くない」

影に白い歯をこぼすような笑みが浮かぶ。

「悪魔だから、最初から俺が悪い」

「……なんだよそれ」

人影は小さく笑い、正面を向き屋敷から遠のいた。  
そして？？。

「先輩！」

人影の動きが、止まつた。人影は、驚いていた。  
目の前の暗闇に、一人の少女がいた。

「……先輩、ですよね？」

人影は黙る。

このタイミングに合わせるように、雲が切れ、そして、月明が少  
女の手元を照らした。

「先輩……」

銃口が、人影にピタリと向けられていた。

\*

大臣は白雪に裏切り者の殺害許可を申し出た。

「お嬢様、奴は裏切り者です。強盗事件、奴は犯人達を殺害しました。お嬢様の望んだ処罰、裁判にかけ法的な処罰を下す事は叶いませんでした。お嬢様の決断を踏み躊躇つたも同然です」

「……そんな」

「《国舞島》での事件、奴はテロリストの殺害にとどまらず、まだ生きていた科学者達も殺害しています。未来の技術の向上どころか、現在を生きている者の命すらも奪いました」

「……」

「奴は、お嬢様を侮蔑しています。奴のお嬢様への反逆行為を、我々は許せません。……お嬢様、どうか奴の処罰、場合によつては殺害の許可を」

「…………」

「IJのままでは、奴の殺戮の手に民衆までもが巻き込まれてしまします。奴がまだ組織にいる間に、処理をしなければ」

白雪は俯き、そして言つた。

「…………少し、考え方させてください」

だが、大臣は譲ろうとしない。

「お嬢様！ 奴をこれ以上野放しにすることは危険です！ 奴は、月夜様をも？？」

何かを言いかけ、大臣は急いで口を抑えたが、しかしもう遅かつた。

「月夜？…………お父様が、どうしたんですか？」

「…………」

途端、饒舌だった大臣の口が動かなくなる。その反応だけで、もう全てが伝わっていた。

だが、白雪は聞かないわけにはいかなかつた。

「大臣！ 言つてください！ これは、命令です」

大臣は渋るように暫し目を泳がせたが、観念したのか、小さく言った。

「奴が……月夜様と最後に会つたのです。……それ以後、誰も月夜

様を見てはいないので。そして、その一人がいた場所には争つた  
ような跡と……月夜様の血痕が

白雪は、もう大臣の顔を見てはいなかつた。大臣に背を向け、白

雪は言つた。

「…………明日。……私が許可を出したら、いいです」

大臣が部屋を出て行くのと、白雪が涙を流したのは同時だつた。

\*

銃口を向けたまま、白雪は叫ぶように言つた。

「先輩……、どうして何も言つてくれないんですか？　どうして何も言つてくれなかつたんですか？　……私は、そこまで信用できな  
い女ですか？」

白雪は俯きながら、言葉を紡ぎ出す。必死に、嘘に縋り付く想いで。

「私は、先輩のことをまだ信じてますから」

その言葉に何かを思つたのか、人影は自身の顔に手を添え、仮面を外すように手を払つた。

そして、

「白雪。お前は、優しすぎだよ」

人影の顔を覆つていた黒色が塵のよう夜の闇の中に消え、ミートはニッヒと唇を歪めていた。

「その優しさが身を滅ぼすとも知らずに」

そのミートの顔を見て、白雪の表情が一瞬こわばり、銃を構える手が、微かに震えた。

白雪は声を震えさせ、怒りと悲しみに染まつた声で訊いた。

「…………先輩。今までのことは、……全部嘘だつたんですか？」

ミートは黙つている。

沈黙は物語る。

「強盗事件、先輩は間違つていないと言いました。でも、先輩は犯人を殺しました。『国舞島』の事件、先輩は私のことを優しいと言いました。でも、先輩はテロリスト共々科学者も殺しました」ミトは黙つている。

だが、黙秘の意味はなかつた。

「先輩。私はそのことに関してなら、許すつもりでした。でも、『そして、叫ぶように白雪は言った。

「どうして、私のお父さんを殺したんですか？」

「…………」

ミトは黙つたままだつた。

黙つたままでも、全てを物語り、黙秘権行使した。

白雪は眼を瞑り、そして言った。

全てと決別するための序章を、彼女は口に出した。

「…………そうですね。私は間違つていませんし、優しいのかもしれません。でも、先輩は間違っています。優しくもありません。だから

？？」

\*

「こじが、線の引きどころかもしない。

白雪に銃を向けられても、僕は酷く冷静に、そんなことを思つていた。

所詮、僕と白雪は身分どころか人間としても違つていたのだ。

白雪はお嬢様で僕の主、僕はその飼い犬の悪魔。

解つていてことだ。

早いか遅いかの違いでしかない。この結末は、変わらないだろう。それなら、僕は？？。

「白雪。僕は僕の行いを間違っているとは思わない。全ては、白雪のために。これが僕の正義だ。だが、それをお前が間違っていると言つのなら、僕は素直にそれを受け止め、断罪を受け入れよう」

白雪は少しだけ視線を上げた。

だが、希望など無い。あるのは、絶望だけだ。

「だが、白雪以外の誰かの台詞を受け入れる気は無い。僕はここから落ち延び、勝手に今までの行いを続けるだけだ」

白雪の視線が、また下がつた。

僕は引くつもりはない。

白雪、お前はどうだ？

僕の人生の終わりを告げる幕を、僕の命の灯火を吹き飛ばす引金を、引けるか？

白雪は、視線を上る。そして、僕を見据えて言つた。

「『めんなさい』

白雪は、その頬を涙で濡らしながらそう言つた。

ああ、ついに泣かせちゃったか。だが、最初から解かっていたことだ。

僕が最初に裏切ったその時から、いつかはこうなると解かっていた。

いや、もしかすると僕は、白雪のこんな表情を見たかったのかもしれない。

だつて、そうじやなきや、なんで僕は笑つているんだよ。

白雪の手元が、引金に掛けた指が小刻みに震える。  
僕は？？？？？、

「？？？？」

銃声が木靈し、『悪魔』の血が舞つた。

「……咲」

そこには、まだ彼女とその側近しかいない。  
正確には、そのすぐ側には死んだ『悪魔』がいたが。  
他の『悪魔』達はまだ、そこには来ていない。

「なんでしょうか、お嬢様」

咲は極めて冷静に主人に尋ねた。

「…………彼を、家族の元へ返してあげてください」「咲は少し驚いた顔をしたが、しかしすぐに頷く。

「お嬢様は、人が集まる前に屋敷に戻つてください。私は、運ばなければいけません。今日中には戻れませんが、大丈夫ですか？」

「…………ええ。大丈夫です」

白雪を部屋に送り、咲は姿を消した。

部屋には、白雪一人となつた。

「…………先輩」

そして、白雪奈美は行方を晦ませた。

七月七日、七夕。

織り姫と彦星が年に一度だけ出会う日の日。

一匹の『悪魔』の死は、記録されることは無かつた。

ただし、この翌日、七月八日はこの国の一つの事件の日となる。

國主、白雪奈美はその権利を放棄し行方不明になる。

そして、その翌日、すぐに新たな國主は決まつた。貧困層からの圧倒的な指示を得て、その男は國主になつた。

その翌日、七月十日には新たな國主、信玖人義の政治が始まつていた。

白雪家の飼つている悪魔、その噂も白雪家の権力が失われるに付れて、消えて行つた。

『悪魔』の死は、世間に知りざれることなく闇に埋もれて行つた。

## 第三章 ～終わりから始まり～（後書き）

一遍書き直したいのでここで止めます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0584n/>

---

悪魔と愛の模様

2010年10月8日12時17分発行